

文部科学省
「インクルーシブな学校運営モデル事業」通信

インクル

NO.1 令和6年7月2日(火)



発行 北海道七飯養護学校
七飯町立七飯中学校

月日の経つのは早いもので、もう少しで1学期の終業式を迎える子どもたちは、日々の学習に一生懸命に取り組んでいます。

さて、七飯養護学校と七飯中学校は令和6年度から令和8年度までの3年間、文部科学省の「インクルーシブな学校運営モデル事業」の指定を受け、現在、初年度の取組を推進しているところです。本モデル事業は、障がいのある子どもとない子どもが可能な限り同じ場で学ぶための環境を充実させるインクルーシブ教育システムの充実に向けて、「授業づくり」と「体制構築」の側面などから、特別支援学校と小中学校等を一体的に運営する「今後の学校づくり」の在り方を検討する事業であり、関係機関との連携協力を促進し、取組の充実を図ることを目的としています。

そのため、本モデル事業の推進状況等を皆様にお知らせし、情報の共有を図るために、「インクルーシブな学校運営モデル事業」通信「インクル」を発行することとしました。どうぞよろしくお願いいたします。

本モデル事業の推進に向け、七飯養護学校や七飯中学校の職員、町教委・大学職員等を構成員とした「連携協議会」が設置されています。その第1回連携協議会が5月28日(火)に開催されましたので、今号では協議会の内容等についてお知らせいたします。



◆ 令和6年度 第1回 連携協議会の報告

第1回連携協議会は、5月28日(火)の午後1時から本校の寄宿舍食堂で行われました。出席者は連携協議会の、以下の方々になります。(敬称略)

氏名	所属等	備考
與田 敏 樹	七飯町教育委員会教育長	代理出席 梧楼 司教育監
北 嶋 公 博	北海道七飯養護学校長	
福 島 由紀子	北海道七飯養護学校副校長	
田 中 昌 行	北海道七飯養護学校教頭	
佐 藤 耕 一	カリキュラムマネージャー(以下CM)	
細 川 和 成	七飯町立七飯中学校長	
深 山 裕 一	七飯町立七飯中学校教頭	
佐々木 甲 二	七飯中学校特別支援教育コーディネーター	
平 石 聡	北海道七飯高等学校長	オブザーバー参加
細 谷 一 博	北海道教育大学函館校教授	
高 石 純	学校教育局特別支援教育課主任指導主事	リモート参加
岡 森 博 宣	道立特別支援教育センター知的障がい教育室長	リモート参加
早 坂 洋次郎	渡島教育局教育支援課義務教育指導班指導主事	リモート参加

会議は以下のように進行しました。

○ 協議会開催に当たって、七飯養護学校北嶋校長より本モデル事業の意義や期待することなどについて挨拶がありました。

○ 次に、以下の①～⑤の事項について担当者から説明しました。

①インクルーシブな学校運営モデル事業の概要について（北嶋校長より）

- ・本事業の背景や目的、事業内容、今年度の取組及び推進状況、3年間の展望等について説明がありました。（4ページの図参照）

②事前意識アンケートについて（佐藤 CM）

- ・アンケート項目についての内容説明と回答の仕方、アンケートに関わる今後の進め方等について説明がありました。

③交流及び共同学習について（佐藤 CM）

- ・七飯養護学校中学部1年生13人と七飯中1年生102人での交流はどのような内容が考えられるか、3回の交流実施時期、交流場所への生徒の移動手段等について説明がありました。

④教員合同研修について（佐藤 CM）

- ・日時：8月28日（水）14時～15時30分
- ・場所：七飯町文化センター

研修の内容として、「七飯中学校の授業におけるICTの活用について」説明いただき、その後小グループに分かれて、それぞれの先生方の「特別支援教育における実践上の悩みや失敗談、子どもとの関わりから学んだこと」等について話し合う内容を予定していることの説明がありました。

⑤ピアサポートを活用した中学校の取組について（佐々木教諭）

- ・ピアサポート活動の目的や意義、ピアサポート委員会の活動、より良い人間関係を形成するための学年や全校活動の取組状況等について説明がありました。

以上の5項目の説明の後に30分程度の時間を取り、本モデル事業に期待することや今後の進め方等について協議が行われ、各委員から貴重な御意見を頂きました。以下、紹介いたします。



-
- ・交流は「助ける、助けられるの関係」ではなく、対等でなければならない。中学生が世話役にならないようにするための指導はどうあれば良いか。
 - ・七飯中学校の生徒が世話役にならないようにしていきたい。七飯中学校では長くピアサポートに取り組んでおり、相手のために自分ができることを大切にしてきたことにより、生徒の心が育っているため、お互いに仲間として認め合い、学び合うことができると期待している。
 - ・3年間のロードマップはまだ十分でないが、進めていく中で2年目、3年目に向けて改善や工夫が盛り込まれるようにしたい。
 - ・本モデル事業に取り組むことで両校の連携が深まることを期待したい。
 - ・交流活動は「ふれあいを通して豊かな人間性を育むこと」と、共同学習は「教科のねらいの達成を目的とすること」の二つを分かちがたいものとして捉え、推進していかなければならない。ポッチャは交流活動に適している。



- 七飯中 1 年生と中学部 1 年生の人数バランスの問題はあるが、七飯中 1 年生の一部生徒との交流でなく、全員との交流が望ましい。それを望む七飯中保護者の声もある。
- 交流及び共同学習の絶対条件として、「相互に関わること」や「対等であること」が満たされなければならない。
- 交流及び共同学習でどのような活動をするかということだが、ボッチャであれば、七飯中 1 年生 102 人を 13 グループに分け、中学部 1 年生の 13 人が各グループに 1 人ずつ入って活動することやピアサポート委員が審判をすることなども考えられる。
- ボッチャをしたときに、単に「仲良くなったね」で終わらせず、心の成長や育ちをどう促していくか、それを教師がどのように見取り、生徒に価値付けしていくか考えていきたい。
- 交流で関わることは相互交渉である。それぞれにどのような言葉掛けや働き掛けをしているか分析するには膨大な労力が掛かる。生徒に感想を書いてもらい、テキストマイニングする KH コーダーを使うなど、定量的に評価していく方法もある。



最後に、七飯中学校細川校長より、本モデル事業の取組が数年後に確かな手応えを感じるものになることを期待するという閉会の挨拶を頂き、第 1 回目の連携協議会を終了しました。

なお、連携協議会は年 3 回を予定しています。次回は 8 月の予定で、事前アンケートの結果や合同研修、交流及び共同学習の具体的内容等について協議する予定です。

今後とも、本モデル事業について、皆様の御理解と御協力を頂きますよう、よろしくお願い申し上げます。

文責：佐藤耕一カリキュラム・マネージャー



インクルーシブな学校運営モデル事業

背景

- ・少子化による児童生徒数減少と特別支援教育を必要とする児童生徒数増加
- ・令和4年8月、障害者権利条約に関する審査で、インクルーシブ教育の権利を保障すべきと国連が日本へ勧告（令和10年度、次回審査予定）

本モデル事業の目的等

- ・インクルーシブ教育システムの推進に向け、特別支援学校と小学校等を一体的に運営するためのポイントについて、「授業づくり」と「体制構築」の側面などから明らかにし、「今後の学校づくり」の在り方を全国に提案
- ・令和6～8年度、全国14地域

交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討

専門性を高めた授業実施のための体制構築の在り方の検討

令和6年度

カリキュラム・マネージャー

連携協議会と連携校間の連絡・調整・助言

5月 第1回連携協議会
・事業の方向性
・役割等の確認など

6月 事前意識アンケートの実施（全教員）

授業づくり
・年間指導計画の調整
・教育課程上の位置付け整理
・授業の内容や方法の検討

7・8月 教員合同研修
・初任段階研修
・合同校内研修（8月28日）

8月 第2回連携協議会
・アンケート結果の共有
計画の確認

9月 教員連携
・七中校内支援委員会への参画
・互見授業

9月 交流及び共同学習
（事前・事後含め全3回）

12月 教員合同研修
・初任段階研修
・合同校内研修

1月 令和6年度成果発表会（地区別）

2月 第3回連携協議会
・成果と課題の整理
・次年度に向けた検討

令和7年度

・成果発表会（地区別大会）

町内各校との交流の拡大

・交流及び共同学習
・合同研修会

令和8年度

・成果発表会（全道大会）

・一体的な学校運営を行う上での体制構築に関する手引の作成